

## D. ボンヘッファーにおける反ナチ抵抗の論理 -教会 ・国家・参加する個人-

著者	山? 和明
号	10
学位授与番号	45
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/38039">http://hdl.handle.net/10097/38039</a>

やま さき かず あき  
山 崎 和 明

学 位 の 種 類 博士 (法学)

学 位 記 番 号 法第45号

学位授与年月日 平成14年9月18日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

最 終 学 歴 昭和58年9月 大阪市立大学大学院法学研究科博士後期3年  
の課程退学

学 位 論 文 題 目 D. ボンヘッファーにおける反ナチ抵抗の論理  
—教会・国家・参加する個人—

論 文 審 査 委 員 (主査)

教授 柳 父 関 近 助教授 空 井 護 助教授 平 田 武

## 論文内容の要旨

### I

[1] 本論文は、神学者・牧師としての立場から、ナチズムに対する思想的批判を展開し、反ナチ抵抗運動としての「ドイツ教会闘争」に参加し、さらに一個人として、国防軍内部の反ナチ勢力によるヒトラー暗殺計画（所謂1944年7月20日事件）に参画したボンヘッファーの政治思想の本格的研究である。

ボンヘッファーは、一方では、いわゆる「世俗化」の神学ないし「成人した世界」における「非宗教的キリスト教」の神学に道を開いた神学者として、20世紀神学史上高く評価されている。他方、そのラディカルな反ナチ抵抗により、戦後はキリスト教界を超えた注目を集めた。ボンヘッファーの思想と行動を無視して、現代キリスト教政治思想史を論じることはできない。それにも拘らず、獄中で書かれ公刊されなかった文書類も多く、著作集編纂（補巻を含む新版全集1986－2001刊）は時を要した。ボンヘッファーの政治思想の全体像を解明する研究は、緒についたばかりである。本研究はその政治思想の全体像を、神学的基底から構造的に解明する試みであり、内外の研究水準に照らしても、極めて意欲的かつ優れた業績である。

[2] ボンヘッファーはルター派に属する神学者・牧師であり、その立場を最後まで貫いた。しかし、ルター派政治思想はカルヴァン派の場合などと異なり、概して極めて保守的であり、世俗権力への恭順のみを説く傾向を持つことが、ウェーバー、トレルチの研究以来指摘されてきた。ナチが権力を掌握しえたのも、プロテスタント特にルター派有権者の支持を得られたことが一因とされてきた。それだけにボンヘッファーがどのような論理を

組み立てることで、ルター派的伝統の内部からラディカルな反ナチ闘争の思想を形成しえたのか、が解明されなければならない。

本論文は、先行研究と資料の慎重な調査を踏まえて、二つの視角から、この課題に迫っている。まず①ルター派政治思想の根幹を成す「二王国説」(Zwei Reiche Lehre;教会と世俗権力を、神の二つの仕方での統治ととらえるが、両者の役割分担を強調した結果、国家 Obrigkeitsstaat をもそれ自体として神聖化するところとなり、きわめて保守的な機能を果たした思想)を取り上げ、ボンヘッファーがこれをどういう神学的論拠でどのように修正していったか、を分析している。その最終的理論化が、独自の国家論を含む「委任理論」であった。さらに本研究は、②この新たな「委任理論」の実践に、ボンヘッファーが注ぎこんだ実践的エネルギーの性質を分析し、ボンヘッファーの政治的実践のエネルギーは、彼の神学が、従来の神学の「宗教性」の意味を転換させたことによって生じたものであることを論証している。

この二つのアプローチにより、本論文はボンヘッファーの政治思想と政治行動の関係を説得的に説明するのに成功している。

## II

[1] 本論文第1章は、ボンヘッファーの思想形成過程と、ナチ体制期における彼のナチ批判の思想と行動を概観している。第一次大戦敗北のあと成立した「共和国」に対し、「ドイツ帝国」と一体化していたルター派教会は、一貫して懐疑的でありつづけた。その後ナチズムがゲルマン人種主義的な「積極的キリスト教」を唱え、プロテスタント諸教会を統合する「均質化」をめざした。その尖兵としてキリスト教界内部でナチ・イデオロギーを代弁したのも、ルター派出身者を中心とする「ドイツ的・キリスト者」であった。台頭するナチズムと「ドイツ的・キリスト者」の運動に、ルター派が保身的に妥協してゆく状況にあって、ボンヘッファーは福音信仰を堅持する立場からナチ批判を強めた。1933年にナチ政権が成立すると、ボンヘッファーは教会内への「アーリア条項」(教会からのユダヤ人の排除)の導入に反対し、マルティン・ニーメラーとともに「牧師緊急同盟」を組織して抵抗した。その後ボンヘッファーは、「政治宗教」としてのナチズムを拒否する「告白教会」運動に参加した。「告白教会」は「バルメン宣言」によって、ナチ政権の種々の全体主義的教会政策に抵抗する「教会闘争」を組織した。この闘争が大量逮捕やルター派の離脱によって終焉した後、ボンヘッファーは囑託として国防軍諜報部に入り、同部々長カナーリス提督づきの特別顧問だった義兄とともに、ヒトラー暗殺計画に関与して逮捕され、収容所で刑死した。

[2] ナチ体制の中で「教会闘争」は困難な反ナチ抵抗を試みた。しかしそれは「教会政策」の問題を超えた全面的反ナチ政治闘争ではなかったし、その限りの抵抗においてさえしばしばルター派は不十分だった。ボンヘッファーが、教会の徹底した抵抗を論じ、かつナチ体制自体の転覆をめざすクーデタ計画にまで参加したことの思想的根拠が重要であ

る。

本論文2・3・4章では、①「教会闘争」でのルター派の反ナチ抵抗の論理の弱点を克服するという課題と、さらに②クーデタ計画に参加したことの思想的根拠について、ボンヘッファーの思想の展開が分析されている。それは具体的には、先の二つの視角（i「二王国説」問題と、ii 現代社会における「宗教性」ないし宗教的行動の意味の問い直し）からの確に考察されている。以下、①②に関する本論文の内容を要約する。

### Ⅲ

[1] ①ボンヘッファーの「国家と教会」の関係についての思索は、基本的にはルターの「二王国説」に依拠しつつ、これを独自に展開したものである。ルターは、剣を持って世俗的正義と秩序を維持すべき官権（Obrigkeit）ないし国家と、キリストの福音が宣教され、それが実践されるべき教会（Kirche）とをもって神の二つの王国（Reich）と考えた。この「二王国説」は、ルターの意図を越えて、教会をして世俗権力への批判精神を失わせ国家権力に癒着させる結果を生んだ。神の与えた「保持の秩序」として国家権力を神聖化する恭順意識が広がったからである。しかしボンヘッファーは、第一次世界大戦中の各国の「戦争神学」を批判してプロテスタント神学に大きな影響を与えた、カルヴィニストのカルル・バルト（その「危機神学」）から影響を受け、祭壇が王座と癒着するかつての「教会国家」も、後のナチ的な「国家教会」も拒否する立場に立った。ボンヘッファーは、ルター派の内部にあって、国家と教会が相互に限定し合い、看視し合う、政治的にダイナミックな修正「二王国説」を、著書『服従』その他の著作や講演で訴え、この思想を実践に移して「反ナチ教会闘争」に参加した。

[2] しかし、1939/40年以降、ボンヘッファーは教会闘争におけるルター派の脱落を目撃し、いよいよルター派的「二王国説」の、世俗権力に対する抵抗機能の弱さを痛感した。また自らのダイナミックな修正「二王国説」でさえ（それが未だ一人一人の人間の具体的な信仰的行動の理論を捨象していたかぎり）、「国家」と「教会」を抽象的に二つの領域（制度）に分離し、固定化することを危惧した。キリストへの帰依（キリストの「主権性」の確認）により、生の諸領域を、その独自性を認めた上で、一個の人格的統合において生きることがを要請したのが、左記の「危機神学」であり、ボンヘッファーはこの思惟に影響を受け、「国家と教会」の関係を改めて理論化した。教会と国家とを峻別するとともに、根本的には国家もまたキリストの主権のもとに機能すべきものであること（国家と国家理性の自己神格化の禁止）を一挙に明確に説きうる理論が展開されるべきであった。ここに自己の「修正二王国説」の欠陥をも乗り越えるべく、彼はそれを独自の「委任理論」（Mandatslehre）へと再構成（遺稿集として出版された『倫理』）した。

[3] ボンヘッファーの「委任理論」とは、「身分」や「職務」をめぐるルター的社会制度観の伝統を継承しつつも、あらためて信仰的生の統一性の観点から、生の諸領域を意味付けた神学理論である。それは、4種類の「委任」すなわち、（i）「国家形成」、（ii）「教

会形成」, (iii)「家庭形成」, (iv)「労働」という諸「マンドート」を, 個人としてのすべての人間に, 神が与えていると理解する。「マンドート」は, それぞれの「専門家」(例えば国家及び教会の官僚)にではなく, すべての「個人」に等しく委ねられているとの理論構成をとったところに, 神学史上ボンヘッファーの「委任理論」が持った重要な意味があった。この「委任理論」では, すべての個人の協力によって担われるべきこれらの「委任」内容が放棄されたり歪められたりするとき, それを正すことはすべての個人の課題となる。

(i)「国家形成」については, 「十戒」後半ないし「自然法」によって, 市民的秩序の維持(のみ)が委託されている。(ii)の「教会形式」には, 宣教と教会秩序の維持, 委任(i)項の実施状況への注意義務および信仰生活の実践が委託されている。すべての諸個人は(i)にも(ii)にも被委託者として関与せざるをえず, これらの「マンドート」の歪曲を防ぐ課題を持つ。このように, 彼は Kirche と Obrigkeit を無媒介の二元的制度とみなす伝統的「二王国説」を批判し, それらを諸個人への二種の「委任」と受け止める新たな理解を提示した。

この委任理論により, ルター派の伝統の内部から, ボンヘッファーは(a)国家権力の逸脱を, 教会が批判するという課題を基礎づけるとともに, むしろ(b)市民としてのキリスト者諸個人が, そうした逸脱を批判する思想と行動の可能性をも, 基礎づけようとした。(c)さらに本論文は, 「委任」としての教会形成と国家形成とが, 然るべき形で実現される将来の構想に, ボンヘッファーのドイツ「再建の理論」を見ている。

#### IV

[1] ボンヘッファーは委任理論により, ナチ政権の教会政策を批判し, また教会側の「二王国説」的な対国家態度の消極性をも批判することが出来た。しかしこの「委任理論」も, ルター派的限度を守り, 「暴君討伐論」まで正当化してはいなかった。ボンヘッファーが何故クーデター計画にまで参画したか, 本論文はさらにその思想的根拠を問い, 別の視角から彼の思想史を追っている。すなわちボンヘッファーにおける「宗教性」の概念の「深化」という視角からである。

[2] ボンヘッファーは, とくに, ナチ体制との苛烈な闘争経験を踏まえることにより, 福音が「この世」の意味を如何にとらえているかの理解を, 危機神学の見地をも超えてラディカルに追求した。ボンヘッファーは, 現世逃避的な「教会生活」も, また単なる世俗性への埋没も, 本来のキリスト教的な人生遂行ではないとし, むしろ, 世俗の中で「非宗教的」に「信仰」を生きる, という逆説的な「世俗肯定」を説いた。この「現世」理解は, プロテスタンティズム本来の「現世内的禁欲」の思想を突き詰めたものと考えられる。世俗の具体的な状況の中で, 個人的な「持ち場」を「発見」し, 神の前述の諸「委任」を果たすことが, 各自の Beruf (神の召命=任務) の発見・相当であるとボンヘッファーは主張した。しかもその際, 罪有るものたるを疑われ得る行為も, キリストに帰依して決断すべき場合(「福音的自由」)もある, とボンヘッファーは考えるに至った。こうした思想の

展開を、本論文は遺稿集『倫理』、『獄中書簡』などをつぶさに検討して解明している。

〔3〕彼が国防軍諜報部を中心とする反ナチ・クーデタ計画に参加したのは、こうしたベルーフ思想のゆえであった。「神とともに、しかし神なしに」というボンヘッファーの言葉は、Deus ex machina の安価な宗教性を排し、むしろこの意味でも徹底的に「非宗教的」に「この世」に内在することにより、はじめて信仰者としてのラディカルな「行動」を実践しうる、という彼の最後の宗教思想を示していると、本論文は捉えている。この「宗教性とは何か」という問題をめぐるボンヘッファーの思索の分析においても、本論文には卓越したものがあり、またボンヘッファーの最後の政治行動を分析する上でその成果を用いたことは、きわめて説得的な効果をあげている。

## 論文審査結果の要旨

〔1〕本論文は、ベートゲ、ファイル、宮田光雄等によって開拓された、ボンヘッファーの政治思想に関する先行研究をふまえ、従来の研究を超えてその全体像を描いた画期的な業績である。その際、本論文がボンヘッファーの遺稿の丹念なテキスト・クリティークに努力を払っていることは注目される。本論文はまた「ナチ・ドイツ」におけるキリスト教政治思想史全般にわたっても優れた知見を与える。国防軍内反ナチ勢力の思想的分析など今後さらに検討されるべきものもあろうが、本論文の研究が高く評価される所以である。

〔2〕本論文提出者は、本論文の他数多くの労作を発表して、学界における中堅研究者として活躍している。また、本論文においては、わが国およびドイツの論文、さらには英米の論文等を多数参照・検討しており、その引用は正確である。本論文提出者が、ドイツ語、英語などの外国語について十分な学力を備えるものであることは、本論文や、これまでに書かれた数多くの論文から、十分に窺うことができる。従って、本論文提出者は、本論文に関する専攻科目及び外国語に関し、東北大学大学院博士課程後期3年の課程を経て学位を授与される者と同等以上の学力があると認められる。

以上により、本論文提出者は、博士（法学）の学位を授与されるに値すると認められる。